

湘南里川づくりフォーラム2017 全体意見交換会概要

○ テーマ

「金目川水系の今後」

視点① 流域の自然を次世代につなぐには

視点② 流域の歴史・文化・生活を次世代につなぐには

視点③ 里川づくりのためにどのように行動すればよいか

○ 内容

[藤野会長]

3つの視点の提示は今年で3年目となるが、一昨年及び昨年は視点①に重点が置かれてしまい、視点③は手付かずだった。今回は、なるべく視点②、視点③に重点を置いた意見をいただきたい。

[参加者]

分科会3で、祭りをテーマとした。地域の中で、川に対する関心・愛着を生み出せる場の形成をすることが、視点③につながるのではないかと。祭りやコミュニティーなど、地域活性化につながるものによって、川への関心が深まるといい。



[藤野会長]

視点②や視点③のような観念的なテーマについて、より具体的な意見・提案があってもよいと思う。例えば、散歩する道の現状に対して、こうすればよいのではないかと、といったものである。

[参加者]

今日のテーマではないが、防災からの視点も必要ではないか。最近では極端豪雨による災害がよく起きているが、そういった災害は川とも関わりがある。極端豪雨がいつどこで発生するか予測できない中、どういう覚悟で川との生活をしていくかが重要。

防災は今生きている人だけでなく、子孫につながっていくもので、里川づくりと防災とを複合的に捉える視点も必要ではないだろうか。環境に興味がある人と防災に興味のある人がうまく融合できるようになれば、より幅広い活動ができる。災害への地域の備え、という視点も入れるといいのではないか。



[藤野会長]

防災も、昔の「暴れ川」とは少し質が違い、ゲリラ豪雨といった局所的な大雨などが増えている。そういった質の違いを加味して考える必要があると思う。

[参加者]

岩手県で起きた豪雨災害に、ボランティアとして行った際、水害が発生するメカニズムを見た。根が弱い木が倒れて流木となり、下流に向かう途中で石などとともに天然ダムとなって流路をふさいでは決壊し、堤防を越えて民家へとあふれる。そのように繰り返すのが災害であると考えている。津波も同様で、流された家で流路がふさがってしまう。

いずれも水の逃げ道がなくなるからで、道を広くし、水の逃げ道を作らないと解決しないのでは。現状は住宅が多く、道が入り組んでいる。対策を考えるべきだ。

[藤野会長]

一時期、治水のために川をまっすぐにして、とにかく早く海に流すための改修が行われていたが、現在はその考えからの脱却を図っている状態。どのように折り合いをつけるかの知恵が必要だ。

里川づくりと治水、双方に理想的な答えがあるかという点、なかなか難しい。

[参加者]

戸川林道に江戸時代の集落の後があるが、そこには洪水で住人が流された痕跡がある。鎌倉時代に洪水があったらしい。その場所の上流に市がセンサーを設置して監視しているようだ。

[参加者]

視点②と視点③について、自分がどんな意見を持っているか考えたが、正直なところ、意見が出しにくいテーマだと感じている。

もちろん里川というのは、先ほど言われたように治水が大事であるし、利水の面もある。かといって治水と利水だけ考えれば私たちが幸せに暮らせるのかといえばそうでもない。景観とも少し異なるかと思うが、そういった別の要素も里川には求められる。

“里川”という言葉だけでは、イメージを描くのは難しい。もう少し具体的なイメージがあれば、それに対して現状では何が不足しているのかを考え、不足しているものがあればそれを補うために行動しようとする具体的な目標ができると思う。そのあたりの掘り下げが、まだ足りていないと思う。

抽象的な言い方であるが、里川というのは、持続可能な社会があったとして、そういった社会を流れている川を里川と呼ぶのでは、と思う。そうすれば次世代につなぐことはもちろん、川のそばで暮らす人も幸福になれる。

それでは、持続可能な社会に流れる川とは何か、という疑問が出るが、一歩ずつでもいいから、何か具体的な里川のイメージを分かりやすく共有できるようなものを作っていく努力が必要ではないだろうか。

[藤野会長]

里川づくりの個人の会が行っているウォーキングや見回りというものも、視点③の行動のひとつであろうと認識しているが、どうか。つまり、大きな理想論をとなえて、行動しなければという点、考えただけで終わってしまう。出来るところから始めなければいけない。

まず自分たちが出来る具体的なことを考えて、意見を出していただければ。

[参加者]

私は今までは視点①のことを考えることが多く、自然を次世代につなぐにはという観点で、自然観察会などに子供たちと参加していたが、視点②の歴史・文化・生活というのは具体的にどのようなことを指しているのかイメージできずにいた。

それが、個人会員の皆さんと見守りウォーキングに参加して、どこに何があるといった歴史や、川に根ざした田んぼ作りなどの文化・生活があることを、歩きながら一つ一つ具体的に抽出して、みんなで自覚して、後世に伝えていかないといけないと感じた。

皆さんの中にある一つ一つのことがみんなに共有されることで、この流域の今の時点の文化・生活の記録となって、その記録をつなげていくことが大事ではないか。

[参加者]

前回のフォーラムにも参加させていただいた。テーマと講師が大変ユニークで、斬新なニュースをお伝えいただき、感謝している。

私は分科会3に参加した。里川と地域の活性化は、多少抽象化してしまうものの非常にいいテーマであり、里川があるから安心、お米が取ればよい、というのではなく、その地域に住む私たち住民が、いかに里川と共に暮らし、共に繁栄していけばいいのか、学生さんたちから提案、あるいは心配していただいた。また、金目川のそばで育ち、今も金目に在住している私の地域に対する思いを聞いてもらい、賛同もしてもらえた。

それらのことが、どのように具体化して結果が得られるのか、少しずつでも報告していただければなら、このフォーラムに参加した意義もあったし、次回のフォーラムへの楽しみにもなる。



[参加者]

先ほど防災の話が出たが、私はあじさいの会に所属しながら、平塚パワーズという女性の防災クラブにも入っている。北九州の井上さんのお話に、人を集めて次第に活動が大きくなっていった、とあった。人を集めるのは大変だが、近所の人の顔がわかるようになるということは、里川づくりにも、防災にも必要なことで、その点では里川のフォーラムも防災も同じなのだと感じた。

また、東海大の皆さんには里川でも防災でも、あじさいの会でもお世話になっており、これからも一生懸命やっっていこうと思っている。

[藤野会長]

東海大に限らず大学全体として、地域との連携によって特色を出していくのが、ひとつの方向性になってきている。

今までの話の中で共通するのは、里川づくりも防災も、地域コミュニティーという近所の連携がある程度ないと成り立っていかない面があるということ。

地域コミュニティーがしっかり出来ているかが重要であり、当然視野に入れて考えていく必要がある。

[参加者]

秦野市では、ふるさと秦野生活美観表彰という制度を行っている。昨年 11 月 3 日に投票を、今年の 2 月 2 日に表彰を行ったが、秦野市の善波川や大根川のボランティアの方が 1 位から 3 位までを占めている。いろいろなボランティアグループがあるので、横のつながりを作れる機関があれば、一気に視点②の底辺を広げることが出来るのではないか。

[藤野会長]

実際に湘南里川づくりというのは、平塚・秦野・伊勢原の三市共同で、市民も巻き込む狙いがある。本来ネットワークは広げていかないといけないが、伸び悩んでいるのが現状だ。

そこをどう変えていけるかというのも一つの課題になる。これは我々組織の問題である。

[参加者]

ふるさと秦野生活美観表彰は、広報で発表され、市から表彰される。見回り隊が表彰対象になっていることで、広報活動にもつながっている。

[参加者]

個人会員が行っている流域の調査はまだ途中だが、立派な表が出来つつある。継続していけば、その情報自体が地域をつなぐ役割を果たすと思う。流域マップを作りながら情報の集積をすることで、地域に発信していくような形を続けるといいのではないかな。

秦野市では、湧水めぐりや川沿いの散歩など、様々なウォーキングの提案・募集が市民に対して行われており、流域マップもその流れに入っている。

そういった情報が集積されて、パソコンなどで情報を見ることができるといった、金目川水系の情報センターの役割を目指して行動してほしい。

伊勢原市でもウォーキングの情報があるので、それぞれの地域をつなげあっていけばすばらしい結果が得られるのではないかな。ぜひ、今の活動をしっかりとつないでほしい。

先ほど、井上先生の話にあったように、水無川や金目川についての情報誌を発行できればいいのではないだろうか。

[参加者]

鶴巻ホテルの会に所属している。また、みんなの会の会員でもある。

鶴巻では、大根川や善波川などの川の整備をしながら、紫陽花や山百合を植えるなどの活動を行い、四季を通じて楽しめる散歩道になった。これを維持するためには相当な市民の熱意が必要。月に2～3回、手入れを続けている。その結果、田んぼの風景と丹沢山塊や富士山を見て楽しめる景観となっている。

しかし、米の生産者は高齢化が進み、田んぼの維持が出来なくなり、休耕田となるということも現実にある。また、水質が相当改善されて、アユが遡上しているという報告も分科会1であったが、周辺の環境はまだまだで、みんなが身近な川に興味を持ち、憩いの場となるように目指さないと、里川の保全は絵にかいた餅となり、前に進めない。

総合的に、川と人のつながりをキーにして、町づくり・コミュニティーづくりをどのように活発的に活動していくのかに視点をおくべきではないだろうか。



[参加者]

始めてからもう何年たつか分からないが、東海大学の許諾を得て、運動部の方を対象に防災課の方と共に災害ボランティア養成講座をやっている。

毎年一回開催されているので、今後もよろしくお願いします。

[藤野会長]

脱線するが、大山の方に行くと富士山は見えなくなるのか？

[参加者]

伊勢原市から西側は、雪化粧の富士山をバックに川が流れていて、非常にいい山並みが楽しめる。魚でも鳥でも、風景でも多角的に楽しめる環境であり、そんな環境資源を活かすためには、市民活動でどのように関心を持ってもらうか、楽しんでもらうかといったことを考えなければならない。

先ほど言い忘れたが、防災面で治水を考えれば、田んぼにはダムの役割がある。河川が流せる水量には上限があるが、田んぼは一時的に水をストックし、後でゆっくり川に流すという大切な役割がある。それが休耕田になり、貯水能力がなくなると、最近の気候変動による水害を防ぐことは難しくなる。そのように多角的に見ると、里川づくりを核にして、私たちの生活の場を見直し、改善していくことが求められていると思う。

[藤野会長]

この時期は小田原厚木道路などで平塚から大学のほうに移動するとき、富士

山がよく見える。ところが鈴川の散歩道では富士山が見えず、代わりに大山が非常に形よく見えて、川べりを歩くと里川らしさを感じる。

地域資源の観点では、富士山は雄大ではあるが、隣の県の山であるのに対し、大山は金目川水系の流域にある、ちょっと地味だが味のある山だ。そういった地域資源は他にあると思うので、見つけたり探したりすることが視点②、視点③につながるのではないか。

個人的な主観では、里川のイメージは大山が見えるあのあたりが、ぴったりする。観光客をどっと呼んで、経済を大きく活性化させるのではなく、地道に地域を少し持ち上げ、活性化させる地域資源を掘り起こしたり、あるいは再発見したりという行動も必要なのでは。

[参加者]

大山は、見るにはきれいなのだが、ヤマビルが困るので川沿いの道を整備してほしい。

[藤野会長]

これは確かに頭の痛い問題。

[参加者]

金目川のゴミ拾いに参加している。小さなゴミも溜まればダムになるかもしれない、災害につながるかもしれないので誰かが回収しないとイケない。川をきれいにすることが、川を次世代につなげることになるのではないだろうか。

災害をなくすためにまず小さなゴミを拾って、川の流れをさえぎらないようにしていきたい。

[参加者]

私の家の近くの花水川は、昔は子供が釣りをしたり、川えびを捕まえたりして遊べるように作られていた。今の川は、先ほどもあったように降った雨をいかに早く海に送り出すかという視点でできてしまっている。

行政は近自然工法という手法で川を作ることになっているはずなのだが、なかなか身近に見ることは出来ない。

私たちのネットワークにいる元県の職員によると、川づくりに関係するのは土木部と環境部だが、土木部だった人が環境部に移ると、逆に環境部の意見に従うようになるらしい。ここに、縦割り行政の弊害があるのではないか。

今日も県の環境担当は来ていると思うが、川の工事をする土木担当は来ないと思う。そこに根本的な問題があるのではないか。

[参加者]

私は土木職として神奈川県庁に採用されたが、実際は公園担当として 38 年勤めた。

県の土木行政のトップを占めるのは“水を制するものは国を制す”という言葉があるように河川行政をやっている人。一番は河川、二番は道路、三番は公園その他。

私自身の経験だが、圏央道の建設当初、相模原では左岸に圏央道が通るとして用地買収を行ったのだが、現在は右岸を通っている。その空いた場所に河川管理者は木を植えない考えであったので、グリーンラインと呼ばれる構想を作り、公園にして木を植えようということになった。

そこで河川管理者に説明に行くと、「河川のある方には植えてはだめ、外側に植えなさい」といわれる。それでいて、河川管理から環境部に移ると、同じ人が今度は木を植えようという。組織を優先して、技術屋としての本来ある摂理に従わないため、意見が簡単に裏返ってしまう。みんなが現場の考えを持てばいいのだが、発言が変わってしまう人が結構いた。

また、緑化推進策として、平塚市のダイクマ通りと、秦野市のさくら通りに桜を植樹したのだが、13 年ほど先に植えたダイクマ通りよりも、後に植えたさくら通りのほうが大きく育っている。ダイクマ通りは狭いのでヤエザクラを、それより広いさくら通りにはソメイヨシノを植えたからで、狭いところにソメイヨシノを植えると道がでこぼこになってしまう。

ある環境に対し、どんな木を植えるのかは、将来を見据えて考える必要がある。

[株式会社 ティラド]

今年 3 月に横浜の NPO と協力して、企業としての生物多様性の展開を検討しようとしている。

昨年 3 月に「かながわ生物多様性計画」が策定されているが、こういった会・市民団体の会合には県の方から生物多様性の計画についての講師を派遣してもらおう制度がある。

来年度から、その制度を利用し、県外の状況や県としての方向性を聞くのもいいのではないか。



[藤野会長]

里川づくりは、行政・市民・教育機関が協働で行うこととなっている。日程の調整がうまくできれば依頼は可能だと思うがどうか？

[事務局]

日程が調整できれば可能だと思う。

[株式会社 ティラド]

3月の件は、今まで県への依頼がなかったので、利用する第1号となった。

[藤野会長]

河川の土木行政は、現在では環境保全を前提として、河川管理・土木工事が行われるのが大前提となっている。治水のほうも環境保全に配慮しており、以前とはかなり様変わりしている。

後は治山関係がどういう位置づけになるのか。環境保全をうたってはいるが、どの程度浸透しているのかは現在のところ、よくわからない。

[小巻副会長]

視点②と視点③に関することで、意見を伺いたい。

皆さんは金目川水系の各流域の中で様々な活動をされている、個人や団体・

行政の方だと思う。それぞれが部分的な枠の中で活動されていると思うが、その単発の活動の情報を発信していくためのツール、また自分たちが困ったときに、他の人はどうやって解決しているのか、情報を得られるツールが、みんなの会ホームページである。様々な情報発信・問いかけをネット上で扱い処理していく活動を第1回目のフォーラムから続けている。そのツールが実際に活用されているかどうかは分からないが、活動している人たちとしては、インターネットよりフェイストゥフェイスで向き合うほうが、より中身の濃い活動ができるという側面もあると思う。

そこで、各団体、個人の枠を超えて、金目川水系全体をひとつの視点として捉えた活動を、みんなの会として能動的に動いてみるのはどうだろうか。例えば、ある一部の地域を取り上げて、そこで活動している人たちを中心に、地域の歴史・文化を学び、地域の子供たちを巻き込んだふれあい活動、といったミニフォーラムを開催する。このように、みんなの会が目標を立てて、流域全体を視野に入れた枠の中で、活動できることをやっていきたい。

また、川の部分部分でゴミ清掃を行っている団体・サークルが、一斉に金目川全体の清掃を行うことを先導する。それぞれの枠を超えた里川づくりを大きな視点で捉えて考えていきたい。

里川づくりフォーラムを始めて、参加者が年々増えているのは、個々の活動を超えて、みんなの会全体で活動したいということではないのか。全体でも、インターネットのやり取りだけでなく、1回だけでもみんなで集まって、例えば伊勢原の公民会に防災をテーマに会員が集まり、防災活動をしている人を講師役にして、ミニフォーラムを行うのはどうだろうか。



[藤野会長]

我々のほうも試行錯誤をしている状態で、能動的に動かなければいけない、という意見が出て、その方向に動きつつある。参加者の皆さんはどう考えるか。

[参加者]

賛成したい。

[参加者]

横浜ゴムの社員寮が金目川の近くにあるが、毎年、近くの川のアレチウリとオオブタクサの除草作業をしている。近くの川で、生物多様性のモニタリングを会社の活動の一環で行っているが、外来種が多いということで少しでも変えられればと作業をしている。

しかし参加者である従業員の中には、この地域だけ除草作業を行っても意味があるのだろうか、と考える人が多い。もし、これが川全体に広がる活動の一環であるとなればやりがいがあるので、情報が広がって、それに関連した動きができるといいと思う。

[藤野会長]

もしかすると、みんなの会の方で呼びかけ等があるかもしれない。あと、見守り隊の団体が活動するとき、事務局に連絡すればみんなの会のホームページに案内を掲示することは可能。活用していただければと思う。

視点の枠を取り払い、金目川水系の今後について、ここを気をつけたい、こうなればいい、という意見はあるか。

私が、個人的に気になっているのは、第二東名の工事で、湧水の量に変化があると聞いたが、この点について客観的なデータがあれば教えていただきたい。

[参加者]

直接調査はしていないが、全然影響がないということはないと思う。ただそれがどう環境に影響するかは、NEXCO も委員会を作ってシミュレーションや調査を行なっている。

秦野市のほうでも独自に調査しているらしいが、聞いている範囲では甚大な影響が出ているとは聞いていない。

いずれにせよ、第二東名のような線状構造物を作り、地下に穴を掘れば、大きな水平の井戸を掘っているようなものなので、当然何も影響が出ないことはありえない。トンネル直下の地下水位は当然下がる。

[藤野会長]

私が聞いた話では、浅井戸で水が出る量がちょっと減ってきているが、それ

は予想の範囲内だ、ということ。そういった予想をされても困る。

[参加者]

いずれにしても、浅井戸には影響が出るが深井戸には影響はない。結局そのあたりは補償なりで考えるしかない。

話しは変わるが、今までに消えてしまった河川、あるいは暗渠化された河川がある。昔はいろいろなところに水辺や小川があって、豊かな親水性があったのだが、都市化によってそのほとんどが暗渠化されて道路になってしまった。生活はしやすくなったけれども、潤いは消えてしまった。

東京などでも元の水辺に戻そうという動きはあるが、100%戻すことはできない。そういった、どこの河川がどうなってしまったのかという河川の歴史を調べて、場合によっては、もう一度親水性のある小川に戻すということをやってみたい。住民の合意が得られればできるのではないか。先生にやってもらえればいいのだが。

[藤野会長]

私も、以前川があったところは知っているが、大規模な宅地造成でなくなってしまった。おそらく公式な川ではなく、湧き水が大根川に注ぐ私有地だったのだろう。そんな場所がいくつかあった。

[参加者]

相模川もそうだと思うが、金目川はコイばかり増えている。私が知っているのは中流域が主体で他の流域は分からないが。アユは増えているものの、50年前と比べると減っている。フナは中流域ではこの2年間、私の網に一匹もかからない。

そこで、コイの増加やザリガニの増加は水の汚染によるという話を聞いたことがある。特定の種類の魚の絶対数・比率と川の水質汚染との関係の資料・指標は大学で持っていないか。

[藤野会長]

川の生物で水質を判定する場合、魚は指標にならないわけではないが、魚は水質が気に食わないと泳いで別の場所にいってしまうので、水生昆虫・巻貝といった移動力の小さい種を指標にして、きれいなところにいる種、汚いところにいる種を見ることで水質の分析をするといったデータならある。また、漁業権のあるところでは、生活がかかっているので資源量のデータは取っていると思う。

金目川は私の知る限り漁業権は設定されていないので、魚に関するデータはほとんどない。その川で釣ったり、網で取ったりする人の経験的なデータくらいしかないと思う。ちょうど魚の話が出ましたので聞きたいのだが、コイが増えるというのは、最後なのか？

[東海大学 教授]

コイは基本的に汚れの耐性が強いので、コイが多い場合、汚れているという見方はよくされる。それ以外の魚は減ってくるといわれているので、今言われたようにコイが多い場合は水が汚れているという見方はされると思う。

[参加者]

関連して、コイもいない川と、コイはいる川とはどちらがきれいな川なのか？

[東海大学 教授]

魚がいる川はきれいというイメージもあるので、魚を放流している川もある。コイを意図的に放流している川と、何もしないので何もいない川という違いだけかもしれない。完全にコイもほかの魚もないのなら、まずい川かもしれない。飼っていたのを川に放して、それが自然に増えるケースもあるのでは。

[参加者]

多摩川が、そのようになっているが、これは都市化そのもの。金目川水系が全体として 50 年後、100 年後、孫やひ孫の世代になったときにどうなっているのかを考えてみるのも、今何をすべきかにつながっていくと思う。

歴史に学ぶというが、その見本・現場となる川が暗渠化したり、田を作るために川筋を変えたりしている。

平塚市に、河内川の支流である高根川というのがあった。高麗山とか丘陵地帯の裾野を流れる川だったが、かなり暗渠化していて、個人的に源流に行こうと思いついてみたが、流れが分からない。最近の見守りウォークで、伊勢原市の板戸川の湧水源でもある毘沙門池に行ったが、どういった川筋で板戸川につながっていたのか、今ひとつ分からなくなっている。

これから 100 年先を考えたときに、近世以降の身近な過去、川を変えてきた歴史を見ながら、あるいは子供に見せながら考えていくというのも、知る・学ぶということで、将来につなげていくことができるのではないだろうか。

[藤野会長]

市としては、毘沙門池を湧水とは認めてなかったのでは？

[参加者]

認めていない。

[藤野会長]

多分、ほんの少しは湧いていると思うが、湧水ではないという位置づけにされている。将来どうなるかを考えたとき、今ある位置づけがどうなってきたのかを調べると、このあとどのような展開になるかもなんとなく分かってくるのかもしれない。



[藤野会長]

視点①、視点②、視点③だけでなく、防災の視点も含めて、今回いろいろ出した内容を引き継いで、来年の1月末から2月の初めのどこかで、湘南里川フォーラム2018というのを継続してやりたいと思っている。お時間があれば是非ご参加いただきたい。